

建築家・喜多村幸夫と建築論の京都学派

市川 秀和 福井工業大学工学部建築土木工学科

藤原 美樹 福山大学工学部建築学科

尾崎 安弘 旭鉄工所／福山大学 OB



図1 福山大学名誉教授・建築家・喜多村幸夫(中央)

出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より

建築の本質は人間の価値観にあり、そこに建築が位置を占め得るか否かが問題なのである。そして、その場で私が生じ得ることは、建築の原理——内在的原理に基づく建築の発現以外にはない。私は建築の内在的原理の発現について責任がある。建築にたづさわる人はすべてそうあるべきである。

建築とは、大きく、動く、堂々として、不同不変、そして完結すべきものと常々想い、学生諸君にも話すのですが、これらをひとつにまとめてその上に自ら品格が備わるとすれば理想の建築でありましょう。到底及ばぬことなのでしょうが、そのように心してやっていきたいと思っています。

喜多村幸夫の言葉

❶ 本稿は、2025年11月29日に広島県福山市で開催されたシンポジウム「福山大学における増田友也の活動」における市川の発表原稿「増田友也と喜多村幸夫」に加筆修正したものであり、文責は市川にある。

1. 建築論の京都学派とその地域的展開

本稿^❶は、京都大学の独創的な建築学研究の一つとして知られる「建築論の京都学派 Kyoto-School of Architectural Theory」が京都・関西圏から周辺地域へ学術展開したことに着目し、その新たな地域拠点を掘り起こすことを目的として、福山大学をケーススタディとした初歩的な第一報である(図1)。



図2 武田五一、藤井厚二、森田慶一
武田と藤井は福山市出身である
出典：図録『武田五一・田辺淳吉・藤井厚二』ふくやま美術館 2004年



図3 増田友也と森田慶一
(1955年頃)
出典：前川道郎「師森田慶一先生」
『京大史記』1988年

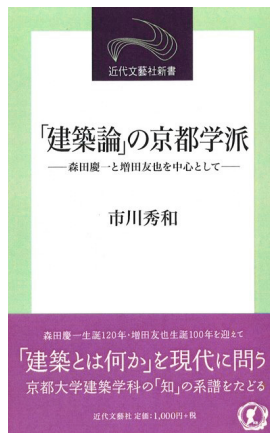


図4 市川秀和著
『「建築論」の京都学派』
(近代文藝社 2014年)
出典：福井工業大学市川研究室



図5 市川秀和編
『「建築論」の京都学派の地域的展開』
(福井工業大学 2023年)
出典：福井工業大学市川研究室

まず「建築論の京都学派」について概説しておきたい。大正9(1920)年に武田五一を中核として藤井厚二や森田慶一、天沼俊一、坂静雄らが現在の京都大学工学部建築学科を創設した(図2)。そして昭和初期から戦後復興期にかけて、森田と卒業生の増田友也が、学際的な知のネットワークを活用して、独自の「建築論」研究を展開した(図3、4)。その思索と制作をまとめて「建築論の京都学派」と呼んでいる。

かかる森田と増田の下で優秀な建築家や研究者など数多い門下生が育ち、母校の位置する京都を拠点にして関西圏から北陸・東海、さらに全国各地へと展開した。その中でも大学教員となって研究教育を実践した事例には、母校の京都大学や関西圏、周辺地域において確認できる。例えば、北陸・福井の地を新たな拠点として福井大学と福井工業大学における地域的展開の実態については既に本誌第1号^②に報告したほか、小冊子(図5)に纏められている。

そこで建築論の京都学派の地域的展開にみる研究射程には、森田と増田の建築論が門下生へ如何に受容されたのか、あるいは逆にそこから森田と増田を如何に批判的に捉え直せるのか、さらにかかる建築論の新たな可能性を次代へ如何に継承展開できるのかなど、有効な視座が多々見出せるであろう。

以上のことから本稿は、北陸の福井に続く新たな拠点として、備後の福山へ研究視座を向け、京都大学退官後の増田が赴任した福山大学建築学科に着目して、その後継者となった喜多村幸夫(1933～2010)を具体的に取り上げる。喜多村の研究教育活動は、建築制作の実践が専ら中心であったが、ヨーロッパ近代建築と古典主義、日本建築の造形意匠と空間現象、ハイデッガー哲学に拠る存在論的建築論を問い続けていたのであり、建築論の京都学派の中心的問題と重なる。以下に喜多村の生涯を辿りつつ作品と思想を簡潔に報告したい。

② 市川秀和(2019)「建築論研究の新たな拠点づくりと地域的展開をめざして」建築論研究 第1号



図6 喜多村作太郎
(1894~1971)

出典：図録『喜多村作太郎
陶芸展』敦賀市立博物館
1994



図8 大学生になった
頃の喜多村幸夫
(1933~2010)

出典：福山大学「喜多村
幸夫アーカイブ」より



図9 森田慶一
(1895~1983)

出典：前川道郎「師森田慶
一先生」『京大史記』1988



図10 増田 友也
(1914~1981)

出典：渡部英彦氏蔵

2. 建築家・喜多村幸夫の生涯と建築作品

2-1 敦賀の窯元の家に生まれて

喜多村幸夫は、1933(昭和8)年9月2日に福井県敦賀市の中心部に位置する鋳物師町にて、父・作太郎と母・知代の二男として生まれた。祖父・謙吉は地元の豪商・大和田家から喜多村家の養子となり、のちに銀行頭取・商工会議所会頭・町長まで務めた人物であり、また書画を好む風流な文化人としても広く知られた。父・作太郎(図6)は、いもじ焼窯元の初代陶芸家として大正期より独自の作風を創り出して活躍し、柳宗悦や棟方志功、荒川豊蔵らの有名な民藝グループと親交した。こうして国際貿易港・敦賀の豊かな風土で、芸術文化の暮らしに恵まれた家庭で幸夫は育ったという。なお兄・午郎は、陶芸家・富本健吉の下で修業した後に家業を継いで2代目となり、その子息の朋太が現在3代目を継承して地元敦賀を中心に幅広く活躍中である。

さて昭和初期の裕福な幼年期を過ごした幸夫にとって12歳の終戦直前に、ふるさと敦賀が大空襲で凄惨な廃墟と化した経験は、その人生に大きな意味を齎した(図7)。戦後復興事業による急速な再建が進む時期に中学・高校生活を過ごした喜多村は、得意な絵画を活かせる「建築家」を志したという。



図7 1945年7月12日の大空襲で廃墟となった「ふるさと敦賀 中心部」

出典：図録『古写真が語る敦賀』敦賀市立博物館 2021

2-2 建築家をめざして京都大学へ

1952(昭和27)年3月に地元の進学校の敦賀高校を優秀な成績で卒業した喜多村幸夫(図8)は、同年4月に京都大学工学部建築学科に合格して京都へ移り住んだ。大学生となった喜多村は、生涯の恩師となる森田・増田とめぐり逢い、優秀な同輩・先輩・後輩らに囲まれて建築を学び始めた(図9、10)。

喜多村の入学した昭和27年は、満州帰りの若き増田が教員2年目であり、建築設計等の専門授業は森田を中心に増田が補佐した。また同学年に白井剛、先輩に前川道郎や川崎清、後輩に加藤邦男や田中喬、瀧光夫など個性的な学生が大勢集い、後の増田の設計活動を支えるメンバーとなる(表1)。喜多村の遺族

表1 森田慶一・増田友也の主な門下生たち（網掛けは後の「福山大学教員」）

卒業年		主要な学生名				
1954	昭和29	前川道郎	室谷誠一			
1955	昭和30	川崎清				
1956	昭和31	白井剛	喜多村幸夫			
1958	昭和33	加藤邦男	田中喬	藤原勉	満野久	渡部英彦
1959	昭和34	土井崇司	瀧光夫			
1961	昭和36	桑田勲				
1962	昭和37	岡崎甚幸	玉腰芳夫			
1964	昭和39	谷口興紀	番斎	水田一征	田中光	
1966	昭和41	小野泰				
1967	昭和42	前田忠直	林一馬			
1969	昭和44	人長信昭				
1971	昭和46	中村貴志	松本静夫			

出典：福井工業大学市川研究室



図11 喜多村幸夫の学生時代の課題作品（左・中央：絵画実習、右：設計作品「学生宿舎」）

出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より

の手元に残された学生時代の石膏デッサンや水彩スケッチ、図学・レタリング（図11）を見れば、美しく多才なデザイン力が満ち溢れて、森田や増田から大いに期待されたことは間違いないだろう。

喜多村は充実した大学生活の最後に卒業研究（設計：小美術館、論文：ルネサンス）^③を提出し、同期の白井と就職の道を選び、昭和31年3月に卒業した。なお増田の設計活動は始まったばかりであり、門下生が大学院へ進学して設計スタッフとなるのは数年後である。喜多村は上級公務員試験を受験して無事に合格し、戦前から優れた官庁設計で知られた「郵政省」へ就職した。

③ 喜多村幸夫の卒業研究は、ご遺族の許可を得て京都大学図書館にて確認している。卒業論文の正式タイトルは「ルネッサンスにおけるアカデミックなもの及びアカデミズム」である。

2-3 郵政省の技師へ

喜多村は、1956（昭和31）年4月より大阪郵政局建築部に勤務し、郵政技師としての日々が始まった（図12）。その1年後に大阪大学を卒業した東孝光（1933～2015）が入局した縁で、生涯の親交を深めることになる。

喜多村の第1作は、郵政省職員宿舎標準設計として取り組んだ「吹田垂水宿舎／木造」（図13）であり、日本建築協会『建築と社会』（昭和34年7月号）に掲載されて「青年技術者顕彰者」に選ばれた。この表彰での喜多村が増田研出身者の第1号であり、これに続いて同輩・後輩の多くが選ばれている。その後に「園部郵便局」や「明石通信診療所」（図14）などRC造の実務設計にも従事し、これらの建築作品には戦前からの郵政建築の伝統スタイルに取り組みつつも、師・森田と増田に通じる洗練された古典的品格が漂っている。



図12 郵政技師となった頃の喜多村幸夫
出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より

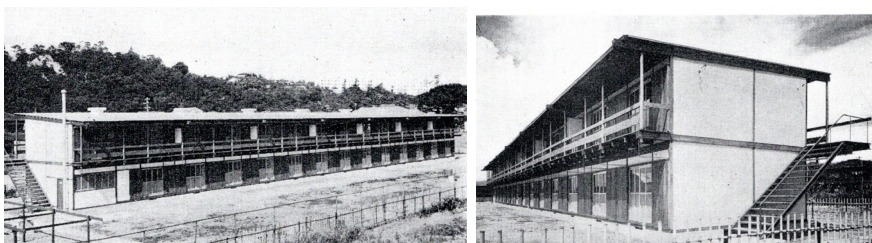


図13 大阪郵政局吹田垂水宿舎(木造) 郵政省職員宿舎標準設計

出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より



図14 明石通信診療所 1959(昭和34)年

出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より

郵政技師となって5年が経つ頃、同期の白井が師・増田の設計活動を手伝うために母校へ戻ったことを伝え知った喜多村は、同じ局内の東孝光が坂倉準三の大阪事務所へ転職したことも合わさって、このまま官庁の技師を続けるよりも「建築家の道」を歩み出すために、母校の増田の下へ帰る決心に至ったと思われる。1961(昭和36)年8月に喜多村は、郵政省を退職した。

2-4 恩師・増田友也の下へ

28歳の喜多村は、増田に導かれて昭和36年9月に文部教官として母校・京都大学工学部建築学教室の助手に着任した。師の下で設計活動続ける機会を得て、日々の増田から建築家としての設計姿勢とともに、人間としての生き方も学んだ。増田は、喜多村を始め門下生と設計作業に猛烈に真摯に打ち込み、また深夜まで美酒を飲み交わしながら「建築の存在の意味」を語り合い、そのうえ自分の「生きる意味」を誠実に問いかけ続けた。こうした増田の建築論と人間性が放つ深い魅力に、門下生たちは強く惹かれていったのである。

増田と喜多村の第1作は「京都市立体育館」コンペ(図15)であり、戦後日本のモダニズム建築が求めたル・コルビュジエ志向や新しい構造表現を反映して、増田からダイナミックな吊屋根構造の設計アイデアが大まかに提示され、喜多村が図面で幾度も検討を重ねてパースで描いて纏め上げた。

これに続く「鳴門市庁舎」(図16)はRC造であるが、オーバブリッジでつながるS造の鳴門市民会館と対比的でありながら、市庁舎の外観をH型钢で幾何学的にデザインする増田のアイデアを喜多村が工夫して実現した。

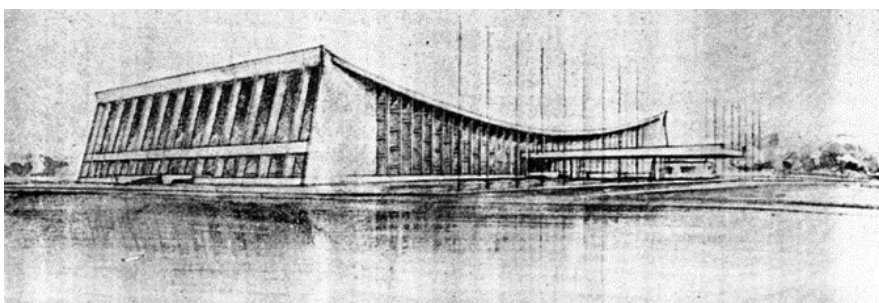


図15 京都市立体育館・コンペ計画案パース 1961(昭和36)年
出典：『新建築』1962年12月号



図16 鳴門市庁舎 1962(昭和37)年：DOCOMOMO Japan 選定建築物
出典：『増田友也 生誕100周年記念建築作品集』同実行委員会 2015



図17[左] 京都市山ノ内浄水場 1963(昭和38)年



図18[右] 大福機工 新社屋 1967(昭和42)年

出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より

2-5 「ゲンプラン」から「生活環境研究所」へ

1963(昭和38)年に増田の下で「設計事務所ゲンプラン」が設立された。そこで喜多村が設計チーフとして担当した「京都市山ノ内浄水場」(図17)では、鳴門市市民会館の外観意匠が巧みに援用されている。続く「大福機工 新社屋」(図18)では、「東山会館」や「智積院会館」と同様にル・コルビュジエの「壁」表現を正面外観で大胆に試み、増田研の独自のスタイルが大いに発揮された。次の「関西セミナーハウス」(図19)は、論理的な空間構成と洗練された造形意匠による静謐な品格が全体性に満ち、周囲の歴史的環境に新たな風景を創り出した。

1971(昭和46)年に「生活環境研究所」代表となった喜多村は、「鳴門市共済会館」(図20)や「阿波町庁舎」(図21)等で、その設計姿勢を貫いた。



図 19 関西セミナーハウス・日本クリスチャンアカデミー 1967(昭和 42) 年
出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より



図 20 鳴門市共済会館
1972(昭和 47) 年
出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より



図 21 阿波町庁舎
1978(昭和 53) 年
出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より



図 22 福山大学・喜多村研究室
(1985 年頃)
出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より



図 23 福山大学 図書館・管理棟
1980(昭和 55) 年
出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より



図 24 福山大学 喜多村ゼミ
2001(平成 13) 年
出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より

2-6 師・増田とともに福山大学へ

増田は 1978(昭和 53)年 3 月の定年退職を目前に、設計活動を支えてくれた門下生が経済的に安定した大学教員に就く努力を重ねていた。1975 年開学の広島県の福山大学における翌年の「建築学科」新設に合わせて、増田研の門下生が次々と移り、1980 年 4 月には増田自身が喜多村とともに着任した。

増田と喜多村は鳴門市の設計現場へ通いつつ、福山大学での教育指導に当たった。卒研生(常松光政)を指導した後、増田は緊急入院して翌 1981 年 8 月に死去したため、増田の後継者として喜多村は設計教育の中心的な責任者となって学科の基礎づくりに邁進した(図 22)。また「図書館・管理棟」(図 23)等の大学施設設計にも深く関わり、現在もキャンパス中心部にシンボルとして建つ「管理棟」は、ランドマークとして学生と教職員に親しまれている。

喜多村ゼミ(図 24)には、設計意匠を志望する優秀学生が数多く集まり、喜多



図25 喜多村幸夫【右】退職記念講演会
2006 (平成18) 年

出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より

村は厳しくも温かい指導で技術者への成長を導きつつ、卒業後も温かいエールを送り続け、静かに見守っていたという。そして2006年3月に72歳となった喜多村は、記念講演「日本の住居——書院造と町屋」を以て26年の教員生活を終え、たくさんの教え子たちに囲まれて退職した(図25)。

3. 喜多村幸夫の建築論——「円通寺庭園」をめぐる

これまでの考察から喜多村の担当した建築作品を通して、師・森田と増田が深く影響していることが確認されたであろう。特に増田の設計態度が、喜多村における建築思考の基底となっていた。福山大学の喜多村研究室の壁面中央には、増田の「揮毫：君看双眼色 不語似無愁」が掲げられており、喜多村にとって増田に日々問いかける、あるいは増田から問いかけられている、そうした師との対峙をもって凜とした心境を常に求めていたように思われてならない。

次に喜多村が思索した建築論とは何か。そこで教員生活26年で唯一の論文「円通寺庭園」⁴に着目しなければならない。1985年の教授昇任に当たって執筆した紀要論文と考えられるが、増田における日本住宅・庭園論(『家と庭の風景』)とハイデッガー哲学(『芸術作品の根源』)に基づく存在論的建築論の喜多村独自の解釈を通して借景庭園として有名な円通寺庭園の成立根拠を考察したもので、従来の庭園研究とは全く異なる鋭敏な内容である。なお論文発表当時のゼミ演習での「円通寺庭園」の板書が残されている(図26)。

④ 福山大学工学部紀要 第7号
1985年

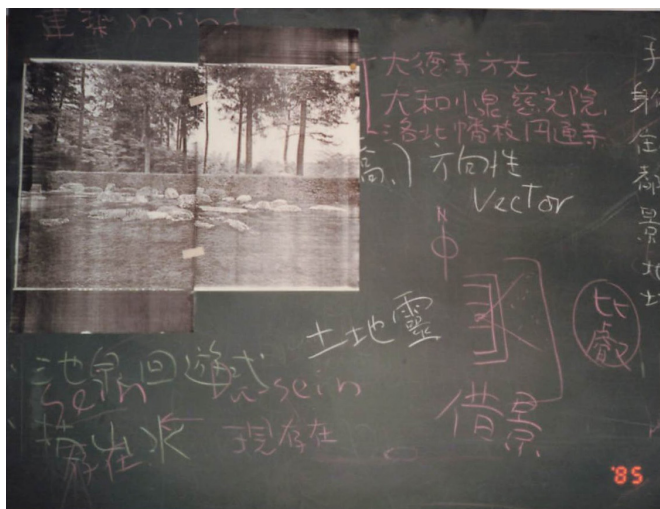


図26 喜多村幸夫によるゼミ演習「円通寺庭園」の板書 (1985 年)

出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より

⑤ 増田友也『家と庭の風景——日本住宅の空間論的考察』ナカニシヤ出版 1985年(『増田友也著作集』第Ⅲ巻所収、ナカニシヤ出版 1999年)

増田の『家と庭の風景』^⑤では円通寺の名称が一か所だけ見られるに過ぎないことから、喜多村のユニークな着眼に拠ることは確かなであろう。ただ増田の「借景庭園」の捉え方(半隔離)が特徴的であることから、喜多村自身が敢えて円通寺庭園を考察対象に選出し、増田の思索の継承展開を意欲的に試みたとも考えられる。まず増田の捉えた借景庭園とは、次の通りである。

造庭におけるもっとも特徴的な半隔離は 借景 の技法であろう。借景とは庭園と その外部の遠景とが 表現的に 有機的に積分されることである。眺望への志向を 或は風景への構成意志を 空間的に実現する それは一つの手法である。それはこの場合 庭園とその外部とを 必ずしも直接せしめることなく むしろ その直接が 庭園そのものの囲いによって遮断されるのであるが この遮断が 即ち計算された半隔離でなければならぬのである。その囲いの材料と 構造と 寸法とが この心理学的効果に関する計算にもとづいて 決定されるのである。このことは 風景そのものの現象的構造が 象徴的である という理解にもよるのであろう。

(増田友也『家と庭の風景』ナカニシヤ出版 p.168)

喜多村が、借景庭園の内と外を媒介する半隔離に注視した増田の論点を踏まえながらも最重要視したのは、半隔離の「籬(まがき)」ではなく、円通寺庭園の成立に不可欠と捉えた苔の大地の「石組」であった(図27)。



図27 円通寺庭園(国指定名勝：京都市左京区岩倉) 比叡山を遠望した借景庭園
出典：福井工業大学市川研究室

石組は全体として石理色調に繊細な派手やかさを持ちながら穏やかである。単調といえるほどに抑制的に、線状に水平に且つ籬に平行して雁行し、中に目をそばだたせるような大石はなく、立石も周辺主として籬のまぎわに極めて低くおさえられて立つ。いづれも深く掘り据えられ、それらの分布は、園地の左奥隅を頂点とする三角形に前辺斜辺を低く、奥はやや高く、残地には配石を一切見ない。そして庭面のすべては、青苔の漣を思わせるようなひろがりのうちにある。

以上が喜多村の論文の冒頭書き出しである。続いて借景庭園を構成する遠景の「比叡の山容」や「中景としての木立の視覚的效果」に触れつつ、喜多村の独自の視点として「石組」の中に「坐す石」と「伏し入る石」を見出し、ここにハイデッガーの『芸術作品の根源』で解き明かされた世界（不伏蔵）と大地（伏蔵）の闘争を援用することで、「濃密な風光の存在感」を放つ「庭と比叡の全空間」を見事に考察し、借景庭園の新たな解釈を提示した。庭園の存在の意味から庭園の生成する根源へと眼差しを深く注入し、ものがものとなる真理を洞察しようと試みたわけである。そして末尾で「円通寺庭園におけるこの坐し石と伏しかくれんとする石、この二石は建築である」と鋭く指摘し得たが、喜多村の論述には不十分さを認めざるを得ない。しかし増田から学んだ建築論の継承展開に挑んだ喜多村の目論見を真摯に受け止め、この論文の視座をさらに深めることで「建築論の京都学派」の新たな可能性が開かれるに違いない。

4. 喜多村幸夫の「遺したもの」

戦後直後の森田慶一・増田友也に学んだ喜多村幸夫をめぐる、その建築家としての生涯を辿りつつ、主要作品と論文を紹介した。これにより喜多村による師の建築論の継承展開を見出すとともに、森田と増田を逆照射する視座が確かめられたのであり、「建築論の京都学派」研究のケーススタディとなった。

2006年3月に退職した喜多村は、5年前に自ら設計した京都の自宅で過ごし、2010年12月に死去した(図28)。この終の住まいは、清楚で白い立方体のモダニズム建築であり、洗練された寸法とプロポーションによる空間構成、そして1本の大樹に寄り添った吹き抜けのリビングに佇むと、喜多村の人柄が今なお伝わってくる。今後、喜多村幸夫の「遺したもの」が福山大学喜多村研 OB を中心に「アーカイブ」として大切に保存活用される予定である。

最後に喜多村のご遺族を代表して、二女・明里さんのご協力に深謝したい。



図28 晩年の
喜多村幸夫

出典：福山大学「喜多村幸夫アーカイブ」より

建築家・喜多村 幸夫 略歴・主要作品 一覧

略歴	1933 (昭和08) 年9月2日	福井県敦賀市鋳物師町にて生まれる
	1952 (昭和27) 年3月	敦賀高等学校 卒業
	1956 (昭和31) 年3月	京都大学工学部建築学科 卒業 卒業設計「小美術館」／卒業論文「ルネサンス」
	1956 (昭和31) 年4月	大阪郵政局建築部 (郵政技官) 就職
	1961 (昭和36) 年9月	京都大学工学部建築学教室助手 (文部教官) 着任
	1963 (昭和38) 年9月	設計事務所 ゲンブラン 設計担当役員
	1969 (昭和44) 年4月	京都大学非常勤講師 (建築設計演習担当)
	1971 (昭和46) 年10月	一級建築士事務所 生活環境研究所 代表役員
	1980 (昭和55) 年4月	福山大学工学部建築学科助教授 着任
	1985 (昭和60) 年4月	福山大学工学部建築学科教授 昇任
	2006 (平成18) 年3月	福山大学定年退職、名誉教授となる
	2010 (平成22) 年12月26日	死去 (77歳：戒名 清心院志建希堂居士)
論文	1985 (昭和60) 年	「円通寺庭園」福山大学工学部紀要 第7号
主要作品⑥	郵政省	
	1958 (昭和33) 年	大阪郵政局吹田垂水宿舎 掲載誌：建築と社会 1959/7
	1959 (昭和34) 年	明石通信診療所
	増田研究室	
	1961 (昭和36) 年	京都市立体育館コンペ 掲載誌：新建築 1962/12
	1962 (昭和37) 年	鳴門市庁舎 (DOCOMOMO Japan 選定建築物)
	設計事務所ゲンブラン	
	1963 (昭和38) 年	京都市水道局山ノ内浄水場
	1967 (昭和42) 年	日本クリスチャンアカデミー関西セミナーハウス 大福機工株式会社 新社屋 掲載誌：建築 1968/3
	一級建築士事務所 生活環境研究所	
	1972 (昭和47) 年	鳴門市共済会館
	1973 (昭和48) 年	鳴門市北灘西小学校
	1978 (昭和53) 年	阿波町庁舎
	福山大学	
	1980 (昭和55) 年	福山大学三蔵会館
	1984 (昭和59) 年	福山大学図書館・管理棟
	2001 (平成13) 年	自邸 (終の住まい：京都府長岡京市)

⑥ 田路貴浩編著『増田友也の建築世界』(英明企画編集 2023年) の「増田友也研究室作品リスト」における「設計担当」と「喜多村幸夫アーカイブ」に基づいて作成した。